

なつやすみ

中一・兵藤 稟晏

私はかっぱだ。だけどみんなは、私がかっぱだということをまだ知らない。「まだ」と言うことは、これからそのことを「公表」するのかと言えば、別にその予定もない。実はお父さんにも、お母さんにも表だって「お前はかっぱなのだよ。」と言われたことも一度もない。近年、かっぱは、だいぶ擬人化が進んで人間と見た目がほとんど変わらなくなってきた。昔から変わっていない所といえば水中に長くいられることと、オリンピック選手もビツクリする位、水泳がうまいことである。あつ、あとキュウリが好物なことも変わっていない。

私はあの夏、少女を助けた。少女は、その町では、足が速いことで有名だった。まさかあんな事故が起こるなんて、誰も、想像さえしなかったはずだ。

私が住んでいるのは、都会だ。生まれ故郷の田舎には、盆と正月の二回帰る。そこにはじいちゃんかっぱとばあちゃんかっぱが住んでいる。二人はいくつなんだろう、私は知らない。私は一人っ子(一人かっぱ!?)なのでじいちゃんかっぱが、遊び相手にと、となりの家に住む、なっちゃんを紹介してくれた。なっちゃんは町一番の瞬足の持ち主だけど、泳ぎが苦手という情報も一緒に教えてくれた。なっちゃんは噂どおりの瞬足だった。

「あの丘まで競走だ。」

なっちゃんは言った。なっちゃんは、はずむように走る。地面に

ついた足を「ポンツ。」と軽くけつたと思つたら、また次の足を「ポンツ。」瞬く間に丘の頂上にたどり着いた。私はと言えば「はあはあ」言いながら、なっちゃんが頂上に着いてだいぶたってから、なっちゃんのとなりに並んだ。

「次は何して遊ぼうか。」

なっちゃんは、次は虫とりをしようとか、あの蝶を追いかけてみようとか、色んな遊びを教えてくれて一日一日があつという間に過ぎていった。

そうそう、私について少し話そう。都会に住んでいる私の一日はこんな感じだ。朝は六時に起きて、七時には家を出る。七時半の電車に乗って二駅目で降りる。降りて三十分近く歩くと、私の通う「立水沼小学校」がある。私の両親が「水沼」という名前にひかれて選んだのだが、校風もなかなか自由で大きなプールもあったので「私もここに行きたい!!」と同意してここに決めた。かっぱだけど、お受験もする。見事合格を勝ちとつたその晩は、かっぱ巻きをお腹いっぱい食べた。毎日普通の人間と同じように過ごす。話しもするし、服も着る。最近ハマっているのは、スマートフォンで検索して新しいきゅうりの料理を探究すること。作って、記録して、写真をとって食べる。「ごま油ときゅうりって合う？」なんて言いながら。こんな時「妹がいたらな。」と思う。一人じゃやっぱりつまらない。

お父さんとお母さんの出会いは、かっぱ橋の上。お父さんがお母さんを見てひと目ぼれしてすぐに声をかけて、そこからおつき合いが始まったそうだ。かっぱも恋をするのだ。ただ昨今の地球は温暖化に、水質汚染。おまけに空気までひどく汚れてきているので、かっぱの数も減少しているのが現状だ。かっぱも少子化って訳だ。まあ、私は人間と結婚するんだろうなって、漠然と考えてはいる。そ

れを考えるとお父さんとお母さんが、かっぱ同士で結婚できたのは
キセキに近いのかもしれない。

話を戻そう。

なっちゃんとは過ごした楽しい夏休みも終わりに近づいてきた。あ
る日なっちゃんは私を

「今日は年に一度の夏祭りがあるから一緒に行こう。」

と誘ってくれた。それは町で一番大きな神社で行われる盛大な祭り
だった。なっちゃんはその神社まで案内してくれた。真っ赤な鳥居
が立派な神社だった。

「ここだよ。大きいでしょ。この稲荷神社、歴史も古くてだいたい
百年以上昔からあるんだコン。」

「コン!？」

「あっ、何でもないコン。」

「なっちゃん!？」

「気にしないでね。ちよっとテンション上がっちゃって。じゃあ、
夕方六時にここに集合ね。」

私達はいったん別れて、また空が暗くなってきた頃集まり星を数
えながら歩き始めた。おはやしを聞きながら、なっちゃんはいつも
の数倍テンションが上がって見えた。ついには軽やかに踊り出した。
しかも、何だかとても変わった踊りで。なんだか見ているこっちも
楽しくなつてとうとう二人で、その変な踊りを踊り出した。私は今
まで、こんなに笑ったことがあるのか!? って位に笑った。お腹を
かかえて笑っていると、気付けばなっちゃんが消えていた。

「なっちゃん」

「なっちゃん」

呼んでも返事がない。私は焦った。どうしようかと、キョロキョ

ロしていると、

「助けてコン。」ブクブク……………

「助けてコン。」ブクブク……………

と、小さな声が聞こえてくるのではないか。声が聞こえてくる方をたどると、なんと、キツネが一匹、木の根にからまって水につかった状態でもがいていた。足には木の根がくい込み今にも足がちぎれそうだ。

「待って今、助けに行くから。」

迷いは無かった。川に向かって思いっきり、ジャンプした。なっちゃんが一瞬にして、人間の顔に戻った。入れ替わるように私は一瞬かっぱになった（一瞬じゃなかった!?!）かもしれない。意識なんてしてる暇はなかった。なっちゃんの足に巻きついた根っこを引きちぎり、呼吸ができるようになった。なっちゃんの顔を水面に押し上げた。

「プハァーッ。」

なっちゃんは、無事だった。

「ありがとう、ゆうくん!?! ゆうちゃん!?! まあどっちでもいっか。」

と言って、初めて私の名前を呼んでくれた。そしてこうも言った。

「ゆうって……………かっぱだったんだね。」

「やっぱ、見られちゃったよね。」

「助けてくれた時、一瞬にして、かっぱになってたし、泳ぎもすごく上手かったから。」

そして、とてもカッコ良かったともつけ加えてくれた。

私もなっちゃんに言った。

「なっちゃんて……………きつねだったんだね。」

「だよね、バレちゃったよね。おぼれた時、私完全にきつねの姿だったもんね。」

隠すことなく、私にそう言ってくれた。

二人は何事も無かったように、夏祭りの会場に向かった。服はビショビショ、なっちゃんは、少し足をケガしていたので、ゆうが肩をかしてあげた。

夏休みが終わった。

またいつもの毎日が始まった。

私はかっぱで、なっちゃんはきつね。

そんなことはどうでもいいし、関係ない。

私は私に自信を持って生きる。

そしてまた来年、なっちゃんに会いに行く。
